

Close up! NUA-ism

～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-OB
できるところまでやってみよう
植田明志

NUA-Student
デザイン学部 デザイン学科
テキスタイルデザインコース 4年
永井見奈

News/Topics

ニュース&トピックス
人間発達学部
■文化創造セミナー
「保育者・教育者になるための
芸術ワークショップ」が開催されました

音楽学部
■「バーカッション フェスティバル 2015
イン ナゴヤ」が開催されました
■「サクソフォンコンサート」が
開催されました
■音楽学部同窓会
第34回 新人演奏会が開催されました
■マルチェッラ・レアー氏
(本学特別客員教授)の
声楽公開講座が行われました

美術学部・デザイン学部
■産学連携事業
ナガサキ工業株式会社
(チームエコラボ)受託研究
「新製品デザイン開発プロジェクト」の
最終プレゼンテーションが行われました

■2015年度 美術学部・デザイン学部
教育懇談会が開催されました
■書道アート展2
「大書仮名～いろはは歌～」展が
開催されました
■美術・デザイン学部同窓会
OB・OG展が開催されました
名古屋芸大グループ校特集
■名古屋音楽学校

コラムNUA
博物館に芸術の力を
人間発達学部教養部准教授 東條文治

Master Artist
マスターアーティスト
美との邂逅
美術学部 准教授
松岡 徹

Information
インフォメーション
■2015年度オープンキャンパス日程
■アート&デザインセンター
2015年度展覧会スケジュール
■2015年度
音楽学部演奏会スケジュール

名古屋芸大グループ 通信



2016年 アートの力で心を癒やす 音楽療法+ケアデザイン 音楽ケアデザインコース新設



32
July
2015



名古屋芸術大学グループ

<http://www.nua.ac.jp>

■名古屋芸術大学 / 大学院: 音楽研究科 美術研究科 デザイン研究科 人間発達学研究科
学部: 音楽学部 美術学部 デザイン学部 人間発達学部
■名古屋芸術大学保育専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園 ■たきこ幼稚園
■名古屋音楽学校(名古屋芸術大学 兼 サテライト)



アートの力で心を癒やす
音楽療法 ⊕ ケアデザイン

Feature

2016年

音楽ケアデザインコース新設



本学では2001年から音楽学部に「音楽療法コース」を設置、現在、多くの専門機関で働く音楽療法士を輩出してきました。音楽療法士の仕事は、身体機能の低下したお年寄りや障がい者に、音楽を通して心地よい刺激を与え、コミュニケーションの質を向上させ情緒の安定、運動感覚や知的機能の改善を図ることです。音楽の力を活用したこうしたセラピーは、医療機関だけでなく、地域のコミュニティや保育の現場など、広く求められています。これらに応えるため、本学では「音楽療法コース」を発展させ、「音楽ケアデザインコース」として新たに設置することとなりました。新設される音楽ケアデザインコースについて、担当のお二人の先生にお話を伺いました。

音楽療法コースは、音楽ケアデザインコースへ

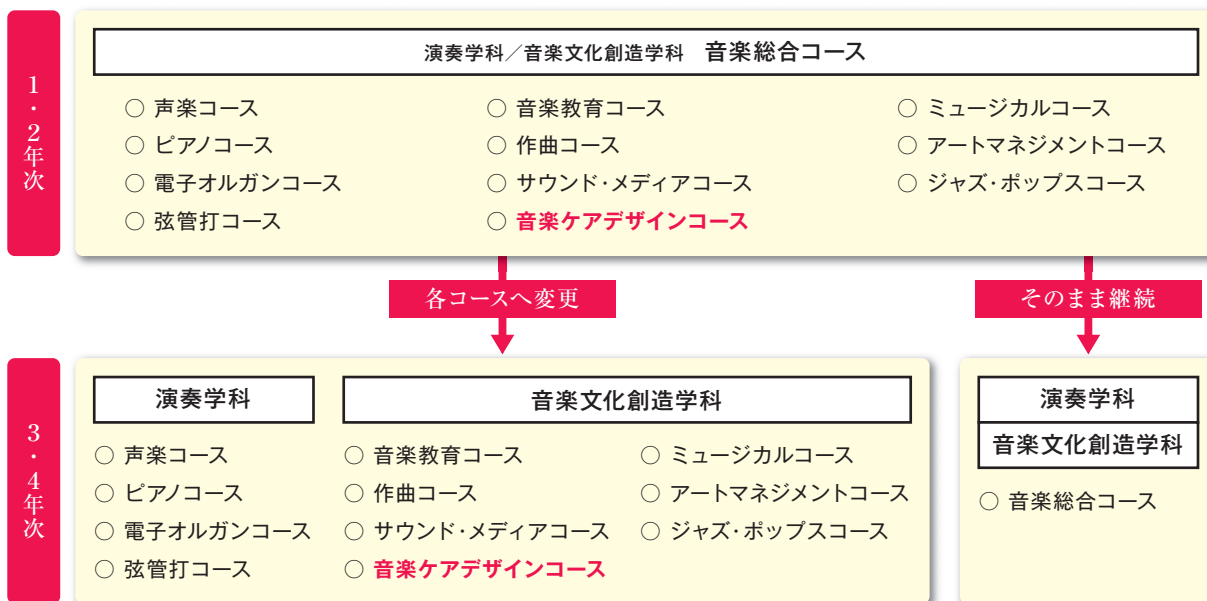
もちろん音楽療法士の資格を取得することも可能

専門を深める13コース

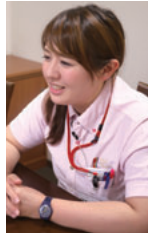
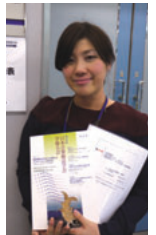


音楽総合コースカリキュラム

自分の適正や目的に合わせて全コースのカリキュラムを自由に選択し受講

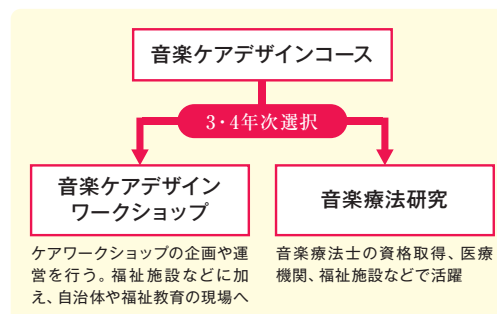
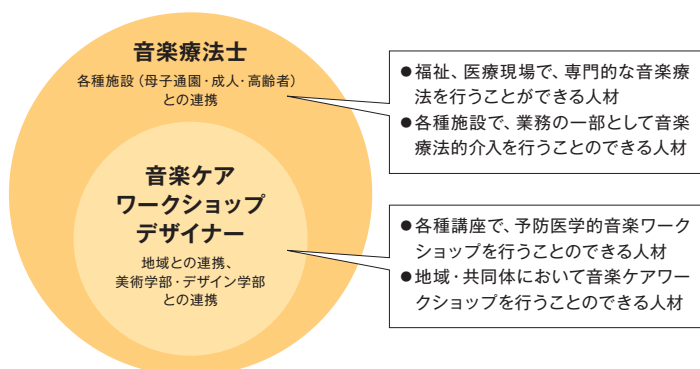


音楽療法コース卒業生の皆さん



2年間の学びをふまえて専門的なコースを選択・受講。そのまま音楽総合コースを選択することも可能。

※エンターテインメントディレクションコースは選択できません。



音楽ケアデザインコースの中でも、3・4年次に志望に合わせて「音楽ケアデザインワークショップ」と「音楽療法研究」のどちらかを選択。それぞれの専門性を深めます



音楽療法コースで培った知識や技能を発展、社会に音楽を生かす



久保田 進子
音楽文化創造学科 教授

-音楽ケアデザインコースが目指すところを教えてください

2001年に音楽療法コースができて、そこから14年が経ちました。今回が初めての見直しとなります。この間の社会の動きに応じ、音楽療法コースをさらに広げ社会のニーズに応えられるコースをと考えています。音楽ケアデザインというと、ちょっと伝わりにくいかもしれませんが、ケアワークショップデザイン、音楽を使ったケアを行う場合の、プランを立てられる人材、ケアワークショップのデザイナー、プランナーを育成するコースとなります。

狙いとして大きく2つのことがあります。最近では全世界的に高齢者の問題があります。日本での場合、認知症になってしまわれた方の問題が大きくクローズアップされていますが、厚生労働省では認知症の予防に重点がおかれ、数年前から、認知症予防の取り組みが行われています。いろんな地域や自治体で研究が行われていますが、私は、2013年から、大府市にある国立長寿研究センターが行う認知症予防プログラム開発に、分担研究員として携わってきました。学習プログラムは出来上がりましたが、それをどうやって普及させていくかという問題があります。これからは、こういった講座ができる人、先頭に立ってプランを立てられる人、そういう人材の育成が急務といえます。音楽療法士の仕事に近く、一緒に結びつけてやってみてはというのが、大きな狙いです。

もう一つは、これまで、授業外で行われてきたアートとのコラボレーションです。美術学部、デザイン学部との合同の動きですね。これらをもっと発展させて、カリキュラムの

中に取り入れて、他学部と共同して作っていくことを考えています。実際のカリキュラムについては、まだこれからの作成になりますが、それぞれ専門性の高い分野の学生たちと、学部単位ではなく、一緒になって物事を進めていけるような学生を育てていけたらと考えています。

-これまでの音楽療法コースと同じように、音楽療法士としての知識と技術を学ぶということに加え、ケアデザインも専門的に学ぶことができるようになるということでしょうか？

音楽ケアデザインコースを選択していれば、音楽療法士の資格を希望があれば取得することができます。これは、今までと同じです。音楽ケアデザインコースになって変更される部分は、音楽療法士を取得しない場合でも、自治体の職員あるいは施設の職員となってケアプログラムを制作することのできる人、その育成もしますということになります。具体的には、音楽療法士とケアデザイナーは、3年時にカリキュラムを選択することで分かります。音楽の構造も勉強し、状況に応じた音楽を使う、あるいは、合ったものがなければ作曲する、即興で演奏するなど、それができる知識と技術を身につけた人を育成したいと考えています。

-卒業後の進路についてはいかがでしょうか？

音楽療法コースの卒業生は、ほとんどが医療機関や福祉施設などに就職している状況ですが、音楽療法士を取得しない場合は、療法士としての専門性は薄まりますが、音楽ケアや、健康と音楽に係わる仕事全般、医療機関や福祉施設の他にも様々な分野が想定されます。例えば、現在は楽器店では、健康と音楽講座、いきいき音楽教室など、高齢者を対象にした音楽講座が数多く開催されています。健康講座を開催する自治体、楽器店、スポーツクラブなども就職先として考えられます。近年では、音楽療法コースの就職状況は非常によく、多くの求人が本学に来ています。音楽療法士をはじめ、音楽と健康に係わる仕事の現場では人材が不足している状況で、卒業後の進路については、大学側としても心配はしていません。関連領域も含めて、音楽療法士とケアデザインを学んだ人とが、連携して仕事を進めていけるようになるのではないかと考えています。そういった意味では、社会のニーズに応える形で新しいコースを設立していると考えてもらった方がいいのではないかと思います。





人と地域、人と人、キーワードは「つなぐ」



音楽療法、音楽ケアには多様な楽器が用いられる。久保田先生が抱えているのは、たて琴のライアー。簡単に演奏できる打楽器をはじめ、各国の民族楽器や音の出る玩具などが集められている。楽器には自由に鳴らしても不快な音が出ないよう音階が調整されているものもある。



和太鼓を使った認知症予防プログラムを実演。文字で表した譜面を見ながら太鼓をたたく。脳を使いながら運動を行うというプログラムに、音楽は最適。



伊藤 孝子
音楽文化創造学科主任 准教授

-カリキュラムについて、音楽療法との違いはどんなことでしょうか？

音楽療法とケアデザインの分野は、完全に分かれていて違う仕事というわけではなくつながっている部分があります。音楽療法士の場合は、医療現場、福祉の施設などで、例えば自閉症の子や認知症や失語症の方などに適切な音楽と活動はどういうことかということを考えてそれを行い、学校へ戻って自分たちが行った音楽プログラムがどうであったかを評価し、次につなげるという活動をしています。ケアデザインでは、もう少し広い概念で音楽と人の関係を捉えています。活動する場所としても病院や福祉施設に限らず、例えば、北名古屋市であれば「回想法センター」や、このところ、学生たちの間で広まってきている保育園児と地域の高齢者が一緒に季節の行事や遊びを楽しむ「お楽しみ会」というものに参加します。医療現場ではなく、地域の人たちの集いがあって、そこへ学生たちが音楽を持って行って参加し、その場にいる方々にあった音楽を演奏しコミュニケーションを活性化させる、そんなことをやっていきます。

-「旧加藤邸アートプロジェクト」のようなものでしょうか？

昨年は、美術学部が主体となって回想法センターでアートプロジェクトをやり、その音楽イベントを音楽療法コースで担当させていただけなんですが、作品とのコラボレーションであるとか作品の中で演奏するとか、すごく可能性のあるこれからの分野だと考えています。昨年の場合は授業外だったのですが、今度からはカリキュラムとして組み入れることとなります。カリキュラムの内容ですが、

アートプロジェクトのような地域のケアデザインワークショップというものが一つの核になってくると思います。いく先としては、認知症の方というよりも認知症になる前の方とか、そのことに気をつけている高齢者の方とか、病院や施設でないところで楽しみながらケアをやっていく、そんなイメージです。教員と一緒にその場のニーズ、どういったことが望まれているのかということをよく聞きその場にあった活動、選曲だとか音楽を作る、場合によっては即興で演奏するというところを実際に行います。ヒアリングに始まり、提供するものを作っていきプロセス全体が、講義の内容です。決まったものを提供するだけではなく、ニーズを把握する方法、ニーズに合わせて学んだものをアレンジしてふさわしい形にして提供する、このことをしっかりとやっていきたいと考えています。そのプロセスの中で、美術やデザインの学生と一緒に作業をできないかと、現在、調整しています。

-音楽を使ってコミュニケーションすること全体がカリキュラムに含まれるということですね。

「つなげる」ということが大きなキーワードです。地域の方、障害を持っている方だけでなくその家族、障害のことを理解してもらえないことや地域とつながりづらいとか、障害を持つ方と、家族・地域とのコミュニケーションにはたくさん問題が含まれています。同じ障害を持っている人同士のコミュニティはありますが、地域の中ではコミュニケーションがない、そういったことがあります。音楽というのは、そういったつながりを作っていくことが得意だと思います。地域の和だとか障害を持っている人、持っていない人とか、いろいろなことをつないでいくようなことが望まれています。

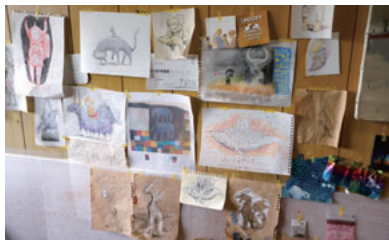
これまでの音楽療法コースの学生を見ると、吹奏楽部出身や小さいころからピアノをやっているような学生が多かったのですが、最近になってそれらに加えバンド活動をやっている学生が増えてきました。そういった学生は音楽を通して輪の中に入っていきやすいことが上手なんですよ。演奏が完璧じゃなくても、楽しさをアピールして上手に入っていける。これがとてもいいと思います。これからの時代、フォーク世代の方たちが対象として増えてきます。コミュニケーションするのにギターや70年代の音楽というものがますます大事になっていくと考えられ、バンドをやっている学生はそれが活かせるのではないかと考えています。



Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism



作品の構想は、漠然としたイメージだけのこと。手を動かしながら作り上げていく。「最初にラフは描きますが、作っていく過程でラフとは離れていきますね。自分がそこで冒険しているような感じですよ」

できるところまでやってみよう

若葉の生い茂る山の景色を見た時、山が入道雲のように膨れ上がっていているように見えたり、自分の方へ山が迫ってきているように感じたことはないだろうか。山の歩道から外れほんの少し森に入っただけでそれまでとは異なった空気が満ち、どこからか自分が見られているような奇妙な感覚にとらわれる…… そんな心の中の自然に対する畏怖を思い起こさせる作品だ。『月を尋ねて』は僕の原点なんです。粘土を作り始めて最初に作った作品です」

幼い頃から絵を描くのが好きで、高校は応用デザイン科という美術系の学科に進んだ。しかし、絵に取り組むことよりも音楽に熱中。バンドを組んでライブに明け暮れ、大学は、美術にしようか音楽に進むかで迷うほどだったという。絵に本気で取り組むようになったのは、高校3年、秋の声を聞く頃になってから。「バンドが上手いかなくなって、自分にできるのは絵しかない。子どもの頃から絵画教室に通ったりして来ましたが、この時初めて、ちゃんと絵と向き合ってみようかと腹をくりました」 覚悟を決めて受験に臨み、本学アートクリエイターコースに進むのだが、その理由が変わっている。「大学は、実家から一番近い芸大ということもあるんですが、なぜか名芸に決めていました。それで名芸のどの学部にしうかとWebサイトを見てたんです。そこでアートクリエイターコースを見て、何かぴんと来るものがあったんです。いい意味で雑多な感じがして、そこに惹かれました(笑)」



大学に入学してから、さまざまな領域のアートにも触れたが、それまで通り絵に取り組んだ。モチーフの細部をどこまでも緻密に描き込む細密画に熱を入れた。しかし、すぐに壁に当たってしまう。「当時、すごく影響を受けていたのが池田学さんという画家です。本当に緻密な超細密画を描く方なんです。僕が描いていた絵は、影響というか真似ですね。単純に真似ごとだったのでそのままではダメだと感じていました」 そこでピン



アトリエのある2階建てのアpartは、作家である先輩や仲間ら4人でルームシェア。一部屋を自分のアトリエとして使っている。



Vol.65 NUA-OB 植田明志

(うえだ あきし)
立体造形作家

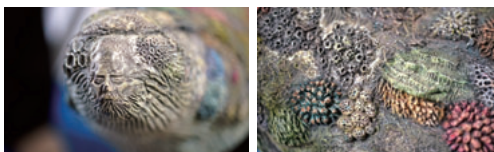
1991年 三重県生まれ
2014年 美術学部アートクリエイター
コミュニケーションアートコース卒業

【個展・グループ展】
2013年 個展 「惑星少年」
2014年 個展 「遠すぎるパレード」
2015年 グループ展 「子供と魔法展〜神話」

本学在学中に初めての個展を開催、卒業後は、造形作家として独立。「ラシック・クリエイターズフェスタ」「ワンダーフェスティバル」への作品出品など積極的に活動中。



「月を尋ねて」 立体を作り始めて間もなくの作品。その完成度に驚かされる。作品の正面には老人の顔。一連の作品群を「森のおじいちゃん」と親しげに呼ぶ



鯨もたびたびもちいられるモチーフ。やはり英知を感じさせる老人の顔が付く



トを与えてくれたのが、今回巻末で登場する松岡徹准教授だった。「松岡先生からきっかけをもらい、細密画を立体と組み合わせればどんなものができるかと試してみたのが立体の始まりでした。それで最初にできたのが『月を尋ねて』なんです。モチーフは、松岡先生の手伝いで行った佐久島の山と自分の故郷、久居の山の風景なんです。佐久島で見て感じた山と自分の記憶の中の風景を組み合わせるって作っていききました」 作品が見る者に山の息吹を思い起こさせる理由は、誰もが持っている山への畏怖を呼び覚ますからなのだろう。



森に始まり、海、空とモチーフは移り変わっていった。近いところの作品にはファンタジー色が強く感じられる。「自分が飽きっぽいこともあって、森を作ったから海にしよう、今度は空へ次は音に、



近作は、ファンタジー色の強い作品が多くなっている。メルヘンと怪獣の融合が面白い

目下取り組んでいる小さなオブジェ。大きさが10cmあまりの小さなミニカーのシリーズ。ちゃんと車輪も回転する

と森羅万象を一巡して次に何を作ろうかとなった時、自分の想像の世界を作ろうと考えました。もともとファンタジックなものが好きだったのと、ゴジラみたいな怪獣、自分の好きだったものと想像とを組み合わせ作っています。でもそれだけだと、想像のものって空虚なんです。ただ、形としてあるだけの空っぽな作品になってしまうんです。それで、作品を見た人が何かを感じられるように、ある種必然的にメッセージを込めています」



アトリエを見せてもらうと、作業場の傍に布団が敷かれている。文字通り、寝食を惜しんで制作に打ち込んでいることが一目でわかる。「ここまで打ち込んだものならできるところまでやってみようと思ひまして……」 散らかったアトリエとそこの生活。生気あふれる姿にエールを送った。

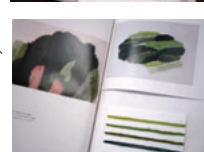
プロジェクトに出たことで経験値が上がりました



FinPlus on Facebook
Vol.66
NUA-Student
永井見奈
 (ながい みな)
 デザイン学部 デザイン学科
 テキスタイルデザインコース 4年



「ポートフォリオは課題で作ったんですが、納得できなくて自分でもう一度作り直しました」 素材感もレイアウトも納得の出来栄え。いずれの作品も完成度が高く、すぐに商品化できそうなものばかり。



「2014年尾張名古屋の職人展」帽子組合さんで売られることになっています。たぶん来年もオアシス21の職人展で販売されると思っています。

「サローネサテリテ2014」出展「molt22」
 いろんなプロジェクトに出たことやインターン、インターンには3社行きましたが、どれも経験になりました。大学でできることをフル活用しましたね。自分次第でなんでもできるよって思います。



「テキスタイルって、もっと専門的な、職人的なイメージがあったんだけど、作品を見るといろんなジャンルがあるね」

そうですね。いろいろなプロジェクトに参加させていただいて、テキスタイルを学んだ者の立場としてどんなことができるのかやってみてきました。

「どれも面白いし、完成度が高いね！ テキスタイルってもっと服飾に近いものかと思ってたけど、意外と幅広いんだね」

私は、グラフィックにも興味があって、テキスタイルとどっちに進もうか1年の頃は迷っていました。先生に相談して話を聞いているうちに、やっぱり布かなと。

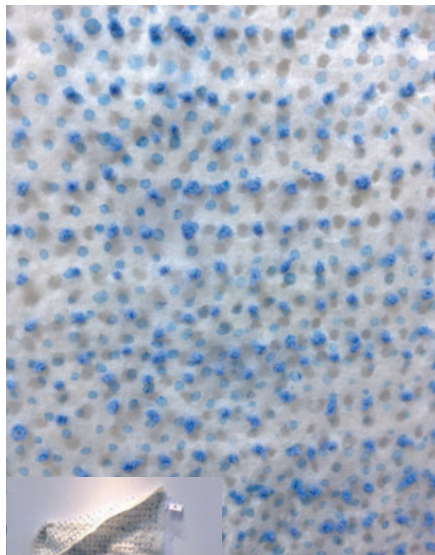
「高校の頃は絵だったんでしょ？」

小さい頃からお絵かき教室には行っていたんですが、高校の頃は、軽音楽部に入ってドラムをたたいてましたね(笑)。2年の途中から美大を目指すことになって予備校に通い出して、でも洋画とか日本画とか、専門的に絵を描きたいとは思えなくて、切り絵をやっていたんです。そうしているうちに切り絵を使ってステンシル(型紙を素材に当て絵の具をつけた筆やスポンジでプリントする技法)をやってみようとなり、そこで布って面白いなと興味を持ちました。

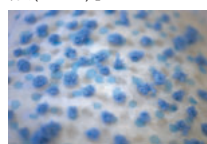
「なるほど、作家志向じゃないんだ。テキスタイルはやってみてどうだった？」

想像以上に楽しかったですね。布を染めたり織ったりすることとか、原料のことっていうのは、大学に来てテキスタイルコースに行くまで全然わかっていませんでした。

実際に、染めたりとか織るっていうことが、こんなにも楽しくて奥深いものかと思っていて、す



ジャパン・テキスタイル・コンテスト2014 奨励賞「葉(みぞれ)」



ごくのめり込みましたね。

「原料ってどんなことやるの？ 糸を紡ぐとかからやるの？」

やりますよ。羊の毛刈りとか綿花を育てるという基礎の基礎からやります。今、着ている服もウールの服も、織っただけでは駄目で、いろいろな加工をして質感を出したりしているんです。そういうことを知るために基礎から一つひとつやっています。原料がどうやってできるかということは授業で学べたんですが、それを作品にどう生かすかというのは、自分としてはあまり掘り下げてできなかったのが、機会があればプロジェクトに参加するようにしました。

「いろんなことやってるね」

テキスタイルばかり見ずに、ほかのジャンルの人と話をしたり、いろんなジャンルの作品を見ることができてよかったです。美術館に行くこととかも好きですし、グラフィックデザイナーの展示を見ることも好きで、そういうものを見てアイデアをためるというか、そういうことが大事なんだ

第3回 コッカプリントテキスタイル
 「inspiration」 佳作
 「カワセミ」
<http://kokka-fabric.com/inspiration2013-results/>



などと思います。いろんな年齢層の方ともお話しすることも自分がないものを教えてくれることになり、経験値が上がったと思います。

「卒業したらどうするの？」

まだ決まってないですけど、繊維業界には入りたいと思っています。イタリアの見本市『ミラノサローネ』の若手デザイナーが参加する『サローネサテリテ2014』に出させていただいたんですが、却って日本のテキスタイルへの興味が大きくなりました。海外の人から『日本の技術はやっぱりすごいよね』といわれて、自分が日本の織物や染め物のことをあまり知らないということに気が付きました。それから、実際に産地に見に行くようになって、岩手のホームスパンという手紡ぎ手織りの文化ですとか、広島のスズメや帆布ですとか、見てきました。自分が実際に産地に入ってテキスタイルデザイナーをやりたいなと思っています。

「まだまだ勉強したい感じだね！」

それはありますね(笑)。

人間発達学部

文化創造セミナー 「保育者・教育者になるための 芸術ワークショップ」が 開催されました

2015年5月14日(木)、本学東キャンパス11号館において人間発達学部の文化創造セミナー「保育者・教育者になるための芸術ワークショップ」が開催されました。1年生を中心に多くの学生と教職員が参加しました。

講師は、アニエス・デフォス氏(俳優・演出家・写真家)とローラン・デュボン氏(俳優・音楽家・演出家)のお二人で、フランスのヴァルドワーズ市で開かれる、子どもと保護者のための舞台芸術の祭典「はじめての出会いヨーロッパフェスティバル」の創設者で、保育に舞台芸術がどのように位置づけられるか?を実践を通して追求しておられます。

開演に先立ち、人間発達学部長加藤義信より講師の紹介を兼ねた挨拶がありました。

セミナー前半は、デュボン氏によるスペクタクル「列島」の上演でした。歌を歌いながら、白い布

と、大小異なる大きさの丸い皮張りの手桶のような用具を用いて、床の上で回したり、手に持ってかざしたり、口元に持ってきて口を開いているような仕草をしたり、様々なポーズを取りながら、また、叩いて音を出したりしながらのパフォーマンスでした。床の舞台上には、後ろに海と陸と空を模した布が掛けられていて、「列島」がイメージされていました。

上演は30分程度で終了し、その後は、会場の視聴者から質問を受けました。「歌っている時は何語で歌っていますか」などの質問に対して、「言葉ではなく、音やメロディーとして捉えてください。」との回答がありました。

セミナー後半は、参加した学生たち全員によるワークショップが行われました。最初は、デュボン氏の手拍子の合図で、会場をゆっくり回りながら歩き、次の手拍子で、今度は早く歩き回るといった繰り返しの内容でした。

次は、4つのグループに分かれて同様の内容で行われました。1グループずつ、広い会場全体を歩いたり走ったりして、止まった時に、隙間が出来ないようにバランス良く使う練習でした。

最初は、何となく恥ずかしがって動きの悪かった学生たちも、デュボン氏の模範演技などに刺激を受けて、後半は、積極的に動き回っていました。

続いて、デフォス氏の指導によ

り、数組に分かれて一人ずつ会場を歩くパフォーマンスもおこなわれました。

こうして、学生たち自らが身体を動かすことを体験したこの日のワークショップは終了しました。



- 1 2 ローラン・デュボン氏によるスペクタクル「列島」の上演
- 3 セミナー会場の様子、熱心に視聴する学生たち
- 4 ローラン・デュボン氏の指導で、会場を歩く学生たち
- 5 同上、早歩きのパフォーマンス
- 6 学生たちに動き方を指導するローラン・デュボン氏
- 7 アニエス・デフォス氏の指導によるパフォーマンス



【プロフィール】アニエス・デフォス(Agnes Desfosses)

フランス、パリ生まれの俳優、演出家、写真家。1980年から劇団に参加、1990年に劇団ACTA (Association de Creation Theatrale et Audiovisuelle) を創設。音楽、造形、ダンス等さまざまな芸術家と共同作品を発表し、視覚的、聴覚的、身体的な芸術言語の総合した舞台芸術の演出を行ってきた。1994年に6か月から4歳の子どものためのスペクタクルを初めて創作して成功を収め、ドイツ、ポルトガル、スペイン、フィンランド、ベルギー等に招かれて上演した。ここで、幼い子どものすばらしい集中力、感受性、想像力に出会った。これをきっかけに、Villiers le Bel 市で、乳幼児のための舞台芸術の祭典「はじめての出会い、生のスペクタクルフェスティバル」を企画。2003年以來隔年に催している。また保育者への研修も多数行っている。2014年に劇団ACTAの代表を退き、もう一つのプロである子どもの写真家の仕事にシフトしている。2014年にはフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を受けた。

【プロフィール】ローラン・デュボン(Laurent Dupont)

フランス、パリ生まれの俳優、音楽家、演出家。1980年にイタリアで、美術家やビデオミュージシャンと共に、実験的ミュージカル劇団を創設。その頃から、ドイツ、フィンランド、イタリア、フランス、オーストラリアの芸術家との共同制作により、視覚と音を組み合わせた、乳幼児のための芸術の創造に取り組む。1992年からは、今回上演される「列島」をはじめ、乳幼児に向けた舞台芸術の作品を次々と発表し、各国での上演と芸術家とのコラボレーションを行ってきた。2008年からアニエス・デフォス氏主幹のACTAとの共同制作を開始。4歳児以上を対象とする「身体で」「机の下」を創作し、2014年の最新作は、保育園の子どもが石鹸をいじる感触について先生や親と語り合ったことばをもとにしたスペクタクルである。デフォス氏の後継者として2014年から劇団ACTA代表。(プロフィールは日本保育学会第68回大会国際シンポジウム資料より抜粋)

音楽学部

「パーカッション フェスティバル 2015 イン ナゴヤ」が 開催されました

2015年5月10日(日)、中部地方で活動する打楽器関係者が一堂に会し、日ごろの活動成果を披露する中部打楽器協会主催イベント「第13回 パーカッション フェスティバル 2015 イン ナゴヤ」が本学にて開催されました。

東キャンパス3号館ホールで行われたメインコンサートには、ゲストにブラジルの有名な作曲家・打楽器奏者のネイ・ロサウロ氏を招聘。今回のフェスティバルのために書きあげた「ヴィブラフォン コンチェルト第2番」を、本学を含むフェスティバル参加の3音大選抜メンバーとともに自ら演奏されました。

また、このコンサートには、愛知県立芸術大学や名古屋音楽大学、名古屋市立名東高等学校、岐阜県

立可児高等学校で活動する打楽器アンサンブルをはじめ、豊田楽友協会吹奏楽団やQuatre-Quartsなど打楽器奏者10チームが参加。

本学からは、手嶋莉子さん、植田光紀さん、鈴木佑弥さん、富ありささん、田代涼平さんの5名でゲストのネイ・ロサウロ氏の作品「FRED NO FREVO」を演奏。この曲はブラジル北東部のお祭りの音楽をベースにしたとても元気な作品で、楽しく活き活きとした演奏を披露しました。

このほかにもロサウロ氏の作品が6曲演奏され、演奏ごとにロサウロ氏自らステージ上で直接作品解説をされるなど、ファンや打楽器関係者にとってはたまらないコンサートとなりました。

メインコンサートに先駆け、東キャンパス2号館中アンサンブル室ではクリニックが開催され、ロサウロ氏による「ラテン音楽のリズムと奏法」と名古屋フィルハーモニー交響楽団打楽器奏者の窪田

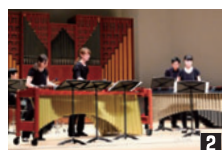
健志氏とジョエル・ビードリツキー氏による「吹奏楽コンクール課題曲講習」が開かれました。

このクリニックの中でロサウロ氏は、マリimbaをはじめ、シェイカーやギロといったラテン音楽でリズムを刻むパーカッションなど

の演奏技法について解説。さらに、ご自身の経験から、「パーカッション奏者を目指すなら、いろいろなジャンルの音楽に触れたり作曲をするなどで、音楽的な成長を目指しましょう。」と受講者にアドバイスをされました。



- 1 ネイ・ロサウロ氏による演奏
- 2 本学打楽器アンサンブルの演奏
- 3 会場一体でリズムを奏でる「ドラムサークル」の様子
- 4 3号館ホール客席の様子
- 5 クリニックの様子(ネイ・ロサウロ氏)
- 6 クリニックの様子(窪田健志氏とジョエル・ビードリツキー氏)
- 7 2号館ロビーで打楽器の展示・販売も開催



音楽学部

「サクソフーンコンサート」が開催されました

2015年5月16日(土)、音楽学部弦管打コースサクソフーン専攻生による「サクソフーンコンサート」が東キャンパス3号館ホールで開催されました。

ソロやアンサンブルを中心にした第1部では、専攻生たちがヘンデルの「シバの女王の入場」をはじめ、アストル・ピアソラ作曲「タンゴ物語より 第3楽章 ナイトクラブ1960」、ジュール・ドゥメルスマン作曲「ファンタジー」など8曲を演奏し、日頃の練習の成果を存分に披露しました。

第2部では、パーカッションやドラムを加えた総勢30名のサクソフーンオーケストラによるNHK大河ドラマ「花燃ゆ」メインテーマや本学特別客員教授ヤン・ヴァンデルロースト氏の「フラッシング・ウインズ」、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』メドレーなど、熱のこもった6曲が

演奏されました。

さらに、「トランペット吹きの日」では、本学教員の三日月孝、滝上典彦、櫻井牧男の3名によるソプラノサクソ演奏を披露。この教員や卒業生が加わった楽しいサクソフーンオーケストラ演奏に会場が湧き、全14曲の演奏後にはアンコールに応じて「故郷(ふるさと)」など2曲を演奏。会場から割れんばかりの拍手と「ブラボー」の声が送られました。

プログラム

[第1部]

1. シバの女王の入場/G.F.ヘンデル (編曲 柏原卓之)
2. ソティスの光/A.クエイト
3. タンゴ物語より/A.ピアソラ
4. ベルガマスキ組曲より/C.A.ドビュッシー (編曲 中村均一)
5. ファンタジー /J.ドゥメルスマン
6. エターナル・ストーリー /山下康介 (編曲 山下康介)
7. フリッソン/J.ノレ
8. グリムの古城/高橋宏樹

[第2部]

9. オペラ「カルメン」より/G.ビゼー (編曲 園田勇一)
10. NHK大河ドラマ「花燃ゆ」～メインテーマ～/川井憲次 (編曲 山崎力愛)
11. 歌劇「魔笛」序曲/W.A.モーツァルト (編曲 渡部哲哉)

12. フラッシング・ウインズ/J.ヴァンデルロースト (編曲 柏原卓之)
13. トランペット吹きの日/L.アンダーソン (編曲 柏原卓之)
14. パイレーツ・オブ・カリビアン/K.パデルト (編曲 山崎力愛)



1サクソフーン専攻生による演奏(「シバの女王の入場」より)
2松井里奈さんの演奏
3山崎力愛さん、島良輔さんの演奏
4教員によるソプラノサクソ演奏
5サクソフーン専攻生による演奏(オペラ「カルメン」より)
6サクソフーンオーケストラの演奏



音楽学部

音楽学部同窓会 第34回 新人演奏会が開催されました

2015年5月16日(土)、名古屋市西区の西文化小劇場において、名古屋芸術大学音楽学部同窓会主催の第34回新人演奏会が開催されました。

この演奏会の出演者は、本年3月に本学を優秀な成績で卒業され、それぞれの分野でその将来が嘱望されている方々です。卒業して間

もない演奏家の皆さんにはこの演奏会を契機としてより一層の飛躍が期待されています。

プログラムは、電子オルガン(渡邊菜月さん)、ピアノ(小出貴恵さん)、ソプラノ(堀江綾乃さん)、チェロ(城間拓也さん)、ソプラノ(早野真衣さん)、クラリネット(丹羽夏望さん)、ピアノ(河原優那さん)の7名による演奏でした。

卒業して2ヶ月の若き演奏家によるフレッシュで感性溢れる演奏に、会場から盛大な拍手が送られていました。



1電子オルガンの演奏
2ソプラノ独唱
3チェロの演奏
4ピアノ演奏

音楽学部

マルチェッラ・レアーレ氏(本学特別客員教授)の声乐公開講座が行われました

2015年5月28日(木)、本学東キャンパス2号館の中アンサンブル室において、マルチェッラ・レアーレ氏(本学特別客員教授)の指導による声乐公開講座が開催されました。

この公開講座は、本学音楽学部演奏学科声乐コースの主催によるもので、声乐コースの学生および院生が課題曲の演奏に関してレアーレ氏から直接指導を受け、その様子が公開されました。

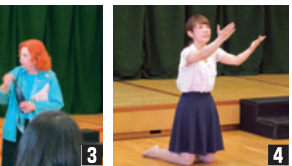
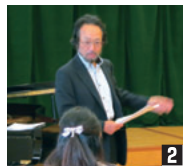
講座の開始に先立ち、声乐コース長で教授の土佐 誠より講師の

紹介を兼ねた挨拶がありました。

「レアーレ氏は、米国でイタリア人の両親の下に生まれ、15歳で『ラ・ボエム』のミミ役でデビュー。その後世界の劇場で主役を務め、レパートリーは50作以上です。中でも、蝶々夫人とトスカは300回以上上演しています。1970年、イタリアで最高のプッチーニ・オペラのプリマ・ドンナに贈られる「黄金のプッチーニ賞」をアメリカ人として初めて受賞。また、1991年には、「マリオ・デル・モナコ賞」を受賞。1994年からは日本に定住して昭和音大、東京芸大、国立音大など各地の音楽大学で指導に当たるとともに、新国立劇場でもコーディネーターを務めるなど、日本のオペラ振興



1講座の開始前に本日出演する学生に話をするマルチェッラ・レアーレ氏(右端)
2挨拶をする土佐教授
3演技の指導を受ける北田一平さん(中央)
4演技を交えて歌っている酒井美穂さん
5花に見立てたハンカチを持って熱唱する山内由香さん
6会場の様子、熱心に聴講する皆さん



に多大な貢献をされています。

言葉は五カ国語（英・伊・仏・独・露）を話されますが、なぜか日本語だけはあまりお話になりません。本日のレッスンはイタリア語と英語で行われ、通訳とピアノ伴奏は、本学卒業生の寺元智恵さんが担当します。」

この後、早速レッスンです。最初に、学生たちが自分の課題曲を一通り歌うところからスタートしました。歌い終わった後で、レアール先生が感想を述べるとともに講評をして、次からは、短い小

節ごとに具体的に指導していくというスタイルで行われました。

発声の仕方や歌い方の指導だけではなく、曲の内容を理解した上で、その情景を想像して身体で表現する演技の指導も行われました。

最初にレッスンを受けた山内由香さん（3年生）のP.マスカーニ作曲の『友人フリッツ』より“わずかな花を”では、歩き方や、花に見せかけたハンカチの持ち方など、細かいゼスチャーも指導されました。山内さんには「とてもすばらしい歌声ですね」とお褒め

の言葉もありました。

このようにして、前半に学部生3名が、休憩を挟んで、後半は院生3名が指導を受けました。

今回レッスンを受けた学生と院生・及び課題曲は以下の通りです。

■山内由香（3年生）

『友人フリッツ』より“わずかな花を” P.マスカーニ

■酒井美穂（3年生）

永遠の愛と誠 G.ドニゼッティ

■北田一平（3年生）

Sop:山内由香

『愛の妙薬』より“いとしい妙薬” G.ドニゼッティ

■桐井祐衣（院2年生）

『リタ』より“この清潔で愛らしい宿よ” G.ドニゼッティ

■窪田知佳（院2年生）

『フィガロの結婚』より“スザンナはまだ来ない～楽しい思い出はどこへ” W.A.モーツァルト

■重兼あずさ（院2年生）

『コジ・ファン・トゥッテ』より“岩のように動かずに” W.A.モーツァルト

デザイン学部

産学連携事業

ナガサキ工業株式会社

(チームエコラボ)受託研究

「新製品デザイン

開発プロジェクト」の

最終プレゼンテーションが

行われました

本学デザイン研究所及びデザイン学部インダストリアルデザインコースは、東海地区の地元中小企業による地域活性化のための研究組織『チームエコラボ』に所属するナガサキ工業株式会社と連携し、「新製品デザイン開発プロジェクト」を発足させ、新製品のデザイン開発を通じて地域の活性化に貢献することを目指しています。

開発製品は、ナガサキ工業株式会社で生産することを前提とした金属素材を用いた家庭用品及び雑貨で、デザイン案は学生が実技授業のなかで考案します。

本年4月8日からスタートしたこのプロジェクトは、すでに多くのステップ（オリエンテーション、工場見学、アイデアスケッチ、デザイン案の決定・製造技術研究・デザイン図制作、中間プレゼン）を経て、6月3日(水)に最終プレゼンテーションを迎えました。

本学U棟102教室で行われた最終プレゼンテーションには、ナガサキ工業株式会社から長崎洋二社長の代行として、事業開発グループグループリーダーの高比良直也氏のほか2名のスタッフが参加。本学客員教授村上 剛の進行でスタートしました。最初に、村上氏からプレゼンの要領について話が

あり、続いて、高比良氏から挨拶を兼ねて「皆さんの若い感性を作品作りに」という目的でスタートしたこのプロジェクト。今日は、自分がどんな商品を世に出したいのか、思っていることを素直に、また、商品のメリットや良さをアピールしてください。」というお話がありました。

学生たちは一人ずつ順番に、デザイン案のスケッチなどを貼り付けたパネルと作品のモデル（ミニチュア版）を用いて、なぜこの作品を考えたのかなど、デザインコンセプトから使用目的、形状や大きさ、既製品との違い、優位性、利便性などを説明していききました。

プレゼンテーションは学生の提案説明の後で、村上氏と高比良氏がそれぞれ質問や講評・アドバイスをするといったかたちで進行しました。

本日出席した学生は17名で、一人2案提案する人も含めて、インテリア用品を中心に装飾品や日用品など様々な製品のデザイン案が提案されました。sukima（机の端に掛けて使えないスペースを利用するもの入れ）、壁に穴やピンを刺さなくても使えるハンガーラック、ウォールラック、ペン立て、ミニカーの立駐、魅せるシューズラック、本棚、キースタンド、一輪挿し、ペン立て、カプセル、ダストボックス、CDラック、アクセサリースタンド、シューズスタンド、傘立て、ハンガータワー…などが提案されました。

プレゼン終了後、高比良氏から今後の進め方についての説明がありました。「本日提案されたデザ

インを全て製造本部に持って行って、そこで本部長以下スタッフに製品化が可能か否か検討してもらいます。また、部分的に改良すれば製品化できるものや、同等のコンセプトで類似の作品を作りたい場合などは、講師の先生を通じて皆さんにお願いする場合がありますので、その際はご協力ください。提案された作品のうち商品化できるものは、試作品作りとレビューを繰り返して、最終的には製品として世の中に出します。すでに、名芸の学生の皆さんのアイデアから生まれた商品として、販売用のサイトを準備しています。また、いずれ、販売され売れた場合、顧客にその商品を届けなければなりません。その時に、商品を梱包するダンボールについても、デザインされたダンボールを使用したいので、ここでも皆さんのお力をお借りしたい。」などのお話があり

ました。

最後に、担当教員の村上氏からこのプロジェクトについて、授業としての総評と、プレゼンで感じた点についての講評がありました。「今回の新製品デザイン開発は、一定の期間（ある程度長い）をかけて行いましたが、現実の社会では、時間的にも内容や成果の面でも格段の厳しさが要求されます。デザイナーとして皆さんが社会に出た時には厳しい現実があることを自覚しておいてください。また、プレゼンでは何をデザインして何を売りにしているのか、はっきり自分の言葉で伝えることが重要で、その伝え方や売り込みの仕方をしっかり勉強（訓練）してほしい。パネルとモデルを上手に活用して、十分説明できるようにしてください。」とのお話でした。

以上で、プロジェクトの最終プレゼンテーションを終了しました。



- 1 プレゼンテーションの要領を説明する村上 剛客員教授
- 2 挨拶をするナガサキ工業株式会社の高比良直也氏
- 3,4 パネルを使ってプレゼンする学生
- 5,6 モデルを使って説明している学生
- 7 手振りを交えて、懸命に説明している様子
- 8 プレゼンで使われたパネルとモデル

美術学部

デザイン学部

2015年度

美術学部・デザイン学部

教育懇談会が開催されました

5月29日(金)、本学西キャンパスB棟2階大講義室において、2015年度の美術学部・デザイン学部合同の教育懇談会が開催されました。この懇談会は、大学に学生を送る

側の高等学校や専門学校等と、学生を教育指導して就職・進学させる大学側の両者が、お互いの意思疎通を図り、連携や協同するために行われているもので、毎年この

時期に開催されています。地元の愛知県をはじめ、岐阜県・三重県など東海地区の高等学校からたくさんの先生方をお迎えして行われました。昨年からは大学のキャンパ

スを会場としたことにより、第一部進学説明会、第二部キャンパスツアー（工房・アトリエ見学）、第三部懇親会、の三部構成で実施されました。

進学説明会では、冒頭、学長竹本義明の挨拶が行われ、学長は、2013年度より取り組んでいる大学改革の中で、今後は、専門教育は云うに及ばず、学部教育（教養教育）の充実と、教育研究の成果の社会への還元（社会貢献活動）を強力に進めていく決意を述べられました。

この後、美術学部・デザイン学部の概要についての説明が行われました。美術学部は西村正幸学部長から、美術学部全体のカリキュラム構成について現状の報告がありました。1年次の基礎教育は、絵画ブロックとアートクリエイターブロックの大きく2つのブロックに分かれて行われていて、特に、アートクリエイターブロックでは、基礎共通トレーニングで学生たちの内にある可能性を発掘し、アートにおけるあらゆる分野の基礎的な知識と技術を身に付けさせることに重点を置いていることが力説されました。そして、2年次以降に進級する各コースについて、それぞれのコースの特徴とその内容が説明されました。また、美術学部として取り組んでいる「産学官連携活動」やインターンシップなどについては、具体的な事例を挙げながら解説。さらに、OHOC（オーホック）100人のクリエイターとの交流やチュートリアル・コーチング制、入学前スクーリングなど、学生たちにやる

気とスキルを身に付けさせるためのカリキュラム上の仕組みについての説明がありました。

次に、デザイン学部については、デザイン学科長の萩原周より学部の特徴や、来年度から開設される新コース、入試の変更点などについての説明が行われました。まず、スタッフ面ではデザイン学部は10コースに分かれていてそれぞれのコースに助手を配置し、教育環境、学生サービスの充実を図り、新入生の基礎教育をバックアップしていること。次に、来年度からインダストリアル、セラミックの2つのコースが「インダストリアル&セラミックコース」に再編され、同時に「カーデザインコース」が新設されることについて説明がありました。近年、多くの卒業生が自動車会社に就職していること、また、ホンダデザインセミナーを毎年本学で実施するなどしていることが紹介されました。入学試験の面では、地域入試の会場が3ヶ所（高知、長崎、沖縄）追加されること、ポートフォリオ審査と面接で行われる「自己推薦入試」が新たに加わること、さらに、AO入試の内容などが報告されました。カリキュラム面では、1年次は、体験型共通カリキュラムのファンデーションを取り入れ、8つの課題を通してデザインの幅広い分野を体験できる仕組みになっていること。次に、合格から入学までのサポートを充実するための「入学前プログラム」を、デッサンなどを中心に実施していること。そして、最後に、デザイン学部に着任している「特別客員教授」が

紹介されてデザイン学部の概要説明を終えました。

続いて、司会から本年度のオープンキャンパスの日程などをご案内しました。

最後に、橋本裕明学生部長からキャリアサポートと奨学金制度について、配布資料のデータブックに基づいて詳しい説明が行われました。最初に1年次の基礎教育について、図書館の利用の仕方から情報検索能力、レポート作成力など大学で学ぶ基本的な能力の養成に力を入れていることが報告されました。2年次には、企画力・資格取得能力・プレゼン能力・情報処理能力などを養成していること。次に、就職支援については、学年ごとのキャリアガイダンスの実施やポートフォリオ作成指導などが行われていること。続いて、本学

の就職率、求人件数、教員採用数、インターンシップの実施状況などが説明されました。そして、奨学金制度と本学独自の学費減免制度、教育ローンの説明をして、第一部を終了しました。

第二部はキャンパスツアーで、参加された先生方は美術、デザイン、美術・デザイン両方の3グループに分かれて、本学教員の引率により、工房・アトリエを中心に学内の施設を見学されました。

第三部の懇親会は席を移してご出席の先生方と本学の関係者で個別の質疑や相談が行われました。会場では質疑応答が活発に行われ、実りある教育懇談会となりました。

なお、音楽学部・人間発達学部の教育懇談会は、同様の趣旨で、6月2日(火)に東キャンパスで行われました。



1 挨拶をする竹本義明学長
2 美術学部について説明する西村学部長
3 デザイン学部の説明をする萩原学科長
4 キャリアサポートと奨学金制度について説明する橋本学生部長
5 日本画コースのフレスコ実技の様子
6 ホンダデザインセミナー Honda Design Seminar

美術学部

書道アート展2

『大書仮名～いろは歌～』展が開催されました

2015年5月15日(金)～20日(木)まで、本学西キャンパスのアート&デザインセンターギャラリーで、書道アート展2『大書仮名～いろは歌～』展が開催されました。

この展示会は、書道家でアーティストの横山豊蘭氏の本学での講義「書道アート1」の受講生34名と、本学書道アート部の学生17名が制作した大書仮名（いろは歌）が展示されたものです。

Gallery BEの会場一杯にたくさんの大書仮名作品だけが展示され、薄明かりと、入り口から入る光で浮かび上がって見える幻想的な雰囲気を出していました。

同時開催された「ラインズ」展（Gallery be）は、横山豊蘭氏の企画・キュレーションによるもので、同氏を始め、中山千明氏（日本画家）、本間絵里加氏（美術家/アーティスト）、高塚 遙氏（京都橘大学3年）、宮野しえり氏（二松学舎大学1年）の作品と、特別賛助出品として、京都造形芸術大学教授で(株)アタマトテ・インターナショナル代表の榎本了彦氏の作品が展示されました。

また、「書道アート部活動報告」も同時開催（studio be）され、部活動に関する多くの写真や映像、さらに、書道パフォーマンスの大書「破」の作品も展示されていました。

期間中には、学生や教職員など大勢のギャラリーが訪れていました。



1 会場にすずりと展示された「大書仮名」
2 「書道アート部活動報告」で展示された写真
3 同時開催の「ラインズ」展、横山豊蘭氏の作品
4 特別賛助出品、榎本了彦氏の作品

美術学部 デザイン学部
**美術・デザイン学部
 同窓会OB・OG展が
 開催されました**

2015年5月22日(金)～27日(木)まで、
 本学西キャンパスアート&デザイン
 センターのギャラリーで、「名古屋芸術大学 美術・デザイン学部
 同窓会OB・OG展」が開催さ

れました。

この展覧会は、同窓会として在
 学生に何か貢献したいという趣旨
 で企画されたもので、今回はアー
 ティスト、デザイナーとして社会

で活躍されている方々、犬飼真弓
 さん(36期洋画卒)・尾野訓大さ
 さん(32期版画卒)・島村舞さん
 (33期デザイン卒)・河地貢士さ
 さん(23期デザイン卒)の作品が



1,2 犬飼真弓さんの作品
 3,4 尾野訓大さんの作品
 5 河内貢士さんによる「うまい仏」の
 パフォーマンス
 6,7 河地貢士さんの作品
 8,9 シマムラ・マイさんの作品
 10,11 兼田真子さんの作品

Column NUA No.29

博物館に芸術の力を

人間発達学部教養部会准教授 東條文治

私が院生の頃、所属した古生物学の研究室では「生物は2度絶滅する」という言葉が流行しました。1度目は生物としての絶滅、2度目はその種の存在の痕跡である化石が地球上から消える絶滅。2度目の絶滅を防ぐ、憧れの職業が自然史博物館の学芸員でした。この時期、私は本当に多くの学芸員の方々にお世話になりました。しかし私は、特定の化石研究を深めるスペシャリストの道は選ばず、化石に使った分析手法を一

般的な自然現象に適用すべくジェネラリストの道を選び、地球物理学の研究室へ進み、理科教育の研究室を経て芸術大学に流れ着くことに。恩返しもできず…。

ところが、自然史博物館と再びかわりを持てる機会が訪れました。昨年12月に本学が豊橋市自然史博物館と連携協定を結んだのです。今年2月には、連携事業としてアメリカからドン・ルイス氏を招待し、博物館の特別企画展示室でミュージアムコンサートを行うことができました。他にも、博物館で本学学生のコンサートを開催、博物館オリジナルのカルタの製作、夏の特別企画展の宣伝用のオブジェの製作・設置、小学校教員養成課程での博物館活用レクチャーといった

プロジェクトが動き出しています。4学部に所属する4名の教養部会の教員(菅嶋先生、茶谷先生、早川先生、私)が発案し、博物館の方々はもちろん、本学の専門の先生方、国際交流の加藤多美子さん、広報企画部の金子次長や学長まで、さまざまな助けをいただいて進み出すことができたことを本当に感謝しています。

昨年度、豊橋市自然史博物館において、本学学生によるコンサートが4回行われました。巨大な恐竜が配置された自然史スクエアでのコンサートは圧巻で、博物館を訪れた人々に強いインパクトを与えたと思います。音楽は場所を選ぶ方がいいですが、博物館ならではのコンサートとして音楽ファンにも楽しめるイベ

展示されました。

また、本学の非常勤講師そして
広島国際学院大学講師であった
26期卒業の兼田貴子さんが昨年

逝去されたことを受け、彼女のこ
れまでの活動の一部が展示されま
した。

展示会初日にはオープニング

パーティーが開催され、出品作家
によるトークや、河内貢士さん
による「うまい仏」のパフォーマ
ンス（スナック菓子のうまい棒に仏

を彫り、拝んだ後にパクパクと食
べる）も行われました。

以下、展示会、オープニング
パーティーの様子です。



名古屋芸大グループ校特集

名古屋音楽学校

名古屋音楽学校では、通常の
レッスンの他に年間を通して数々
の事業を実施しております。今回
は、今春開催した事業と、今後開
催する新規事業をご紹介します。

日本の音楽界の登竜門である日
本音楽コンクールにおいて、各部
門1位の栄冠に輝いた新進演奏家
による「第83回日本音楽コンク
ール受賞記念演奏会」（毎日新聞
社、セントラル愛知交響楽団と共
催）を、4月17日（金）に愛知県芸術
劇場コンサートホールにて開催し
ました。バイオリン、チェロ、声
楽、ピアノの出演者のうち、チェ
ロの佐藤春真さんと声楽の駒田敏
章さん（当校の履修生）は名古屋
市出身ということもあり、約1,
500名のお客様をお迎えし、熱気
あふれた感動ある演奏を披露い
たきました。

また、リトミック指導者養成の
「ダルクローズ・リトミック春期
セミナー」を、3月29日（日）から4
日間にわたり開催しました。この
セミナーには北海道から沖縄まで

全国各地から、免許取得を目指す
方、既に教室を開設しているレス
ナーの方や学生など、55名が受
講しました。今回は「発達障がい
のための感覚統合を用いたリト
ミック」の特別講座を並行して開
催し、特別支援学校を含む学校や
施設・団体の関係者が35名参加
しました。なお夏期セミナーを8
月17日（月）から5日間にわたり開催
する予定です。

名芸大の姉妹校のひとつである
「パリ・エコール・ノルマル音楽
院」は、当校が音楽院の公認提携
校（世界で3拠点）として、毎年
ディプロマ取得を目指す学生の授
業（ピアノ科レッスン）を展開し
ております。今年度は11名の学
生（今年度の名芸大生は2名／後
述）が在籍しているほか、当校が
保有しているシテ・デザール（パ
リ市等が運営している芸術系留
学生宿舎）には、留学生4名が寄
宿して現地音楽院で研鑽を重ねて
います。

5月初旬に音楽院のマンサール
副院長が来校の上国内試験を実
施して、ディプロマ生全員が合格
し6月中旬に音楽院での本試験に
のぞみました。名芸大3年の中島

舞さんと同2年の井上優さんを含
め8名が合格し、ディプロマの取
得をしました。

また国内試験に併せて行われた
次年度（10月から1年間）の留学
オーディションにはピアノ科2名、
フルート科4名、作曲科1名の計
7名がエントリーして留学が決定
しました。当校は、今後とも名芸
大生の音楽院ピアノ科ディプロマ
取得のチャレンジや留学（ピアノ
科以外も）する方へのバックア
ップをして参ります。

今後の新規事業として、クラ
シックバイオリニストをはじめと
する弦楽器奏者を対象とした
「ジャズバイオリン・ワーク
ショップ」を、7月より隔月の計
6回シリーズで開催します。講師

は当校でバイオリンを学び、現在
は当校の中日校の講師であり、東
京を中心にジャズバイオリニスト
としての演奏活動やプレーヤー育
成に力を注いでいる北床宗太郎氏
が当たります。また、10月からは、
当校が音楽教育専門機関としての
ノウハウを活かした「音楽鑑賞講
座」を開設する予定です。クラ
シックのみならず幅広いジャンルの
音楽芸術の知識を深め、音楽鑑
賞の楽しみを体験していただく教
養講座として展開していきます。

当校は、名芸大の特別講座や関
係者への施設使用提供をしてい
ますが、今後とも名芸大グループの
一員として、名古屋の栄エリアに
位置しているメリットを活かした
連携を図って参ります。



第83回 日本音楽コンクール受賞記念演奏会より
バイオリン：吉田南さん／指揮：松尾葉子さん
（写真提供毎日新聞社）



ディプロマを取得した
中島舞さん（右）と井上優さん（左）

ントへと育っていくことを期待しています。ま
た、自然史博物館はもともと芸術と無縁では
ないといえます。博物館に不可欠な化石生物の復
元図・復元模型は想像の部分が多く、学術的に
踏み外せない制約を除けば作家が作り上げる芸
術作品ともいえるものです。

博物館でも、独立採算や来場者数目標の達成
といった成果主義が導入され、業務の三本柱で
ある、研究・教育・普及のうち、教育や普及に
注力せざるを得ないそうです。リピーター確保
のため博物館は毎年特別企画展で新しいオブ
ジェを製作する必要があり、業者への委託費が

重荷になっています。例えば、この展示の製作
への協力や、音楽イベント、ワークショップの
展開は、本学が持つ総合芸術大学の力を存分に
発揮できる場所といえるでしょう。さらに五感
での感動を伴う学習活動は脳への定着が良いと
され、理科教育の分野でも注目されています。

芸術系3学部と教育系1学部の有機的な融合
を目指す総合芸術大学である本学との連携が、
自然史博物館の教育・普及活動の新しい地平を
切り開く、そんなチャンスを迎えているのかも
しれません。





「伯林ノ月」(ベルリンノツキ)
粘土、金箔、その他
17×13×14.5cm
2008
撮影：山口幸一



「佐久島地蔵」
コンクリート、その他
41×15×22cm
佐久島・愛知
2009
撮影：香村聖文



マスター to アーティスト 【第29回】

＜ 美との邂逅 ＞



面5 (爬虫人類)
木、紙、アクリル 43.5×35×10cm
1990 (学生時代)

松岡 徹 美術学部 准教授

(まつおか とおる)

1968年 愛知県生まれ。
1991年 名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース卒業
1992年 名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース研究生修了
1998年 バリ国際芸術都市(シテ・デ・ザール)に短期滞在
2004-05年 スペイン国立バルセロナ大学大学院に留学

作品が面白い。愛嬌のある顔立ちやとぼけた佇まいの像、愉快なかぶり物とそれらを実際にかぶった写真……、文字通り、思わず笑みがこぼれてしまう面白さがある。こんなに面白くて大丈夫？と心配になっても、作品たちは「大丈夫だよ！」と優しくも力強いいてくれている気がする。そうして、なぜか作品を見ている自分がすこし元気になっている。学生時代からさぞや破天荒な作品を作っていたのではと思わせるが、実情は全くの逆だった。「なにをやっても全然しっくりこなくて、とにかく焦って探していましたね」

生まれつき足が悪く、小学生の頃に大きな手術を受けた。子どもらしく表を走り回るところか、体育はいつも見学、遠足も現地集合といった、そんな子ども時代だったという。必然、楽しみは絵に向かった。絵画教室に通い、そうした流れで本学洋画科に入学するものの、漠然となにか作りたいという気持ちがあるだけで、大きなキャンパスに絵を描きたいと思っていたのではなかったという。「油絵をやるといことについては、自分よりはるかに

上手な人たちがごろごろいて、テクニックだとか作品のこなし方が全然違って、とてもじゃないが太刀打ちできない。入学してすぐにわかって、どうしたものかと思っていました。美術に対して知識がなかったということもありますね」デッサンが苦手、筆で描くことにも悪戦苦闘していた。当然、芳しい結果が残せるわけもなく、焦りばかりが募った。そんな時に、版画コースが新設される。「どうしてこうかと思っているうちに版画の授業で、何人かの先生が自分の作品を面白がってくれました。版画は、これまでみんながあまりやったことをないようなことをやるじゃないですか。その分技術的な面で差がないし、しかも筆で描くのではないので、自分のイメージに近いものが描けるかもという期待もありました。版画の先生は、西村正幸先生もそうですし、以前いらっしゃった武蔵 篤彦先生(現京都精華大学副学長、1983-88年本学専任講師)など、個性的な先生が多かった。自由な雰囲気がよくて、ここだったら自分の得意なことを生かせるのかなと3年後期からコースを変更しました」

版画に移ったからといって作品がよくなったわけではなかった。版画コース第1期生は6名。自分以外の5名は、洋画でも一目置かれるような上手い学生や版画に強い魅力を感じている者たちだった。強く版画そのものに惹かれたわけではなく、版画以外のこともできそうだと移ってきたのは自分だけだった。「まずはいろんな版種の授業がありますよね。そこで自分を試していくんですけど、結局、それはどれもピンとこないんです(笑)。なにをやってもいいといわれていたので、課題以外は絵を描いたり、立体を作るののをやらせてもらっていました。洋画では、大崎正裕先生と退官された森真吾先生のお二人が僕の作品を面白がってくれて、洋画の中に場所を確保してくれて『描きに来いよ』といってくれていました。そんなわけで版画に移ったものの、版画ばかりで作っていたわけじゃないんです。でも思うようなものができなくて、何とかできないかなあと気ばかり焦っていましたね」小学生の頃、現在の作品につながる原体験があった。それは、母親の実家である北設楽の「花祭」だった。花祭で使われる鬼の



「ココロノコロモ No.58-は」
250×300cm 木材、紙、布、顔料、etc
ラブリコレクションギャラリー/愛知 1993.6.

当時の現代美術の流れもあって抽象的な形というか、大きな紙の作品をたくさん作っていました。クールでかっこいいのが現代美術だと思っていたので、ちょっと無理して作っていたんだと思いますね。



「見えてくる。」 写真作品
佐久島・愛知 2003



「海神さん」
粘土、その他
佐久島・愛知 2003 撮影：香村聖文

佐久島、正念寺の外に鎮座する作品。土着的なパワーが満ちあふれる。釣りの神様として近隣の人々からも愛され、観光客が上げてゆくお賽銭が絶えない。「僕の作品なんだけど、もう僕の手から離れて島の人たちから神様として扱われています。不思議な気がしますね」



「大和屋観音」
粘土、金箔、その他 佐久島・愛知 2003 撮影：香村聖文



「ヌカタマシ」
岡崎市、額田町合併記念モニュメント
ブロンズ、FRP、その他
岡崎市/愛知 2006



「刈谷ファンタジー計画」
ポスター
刈谷市美術館/愛知 2006



北設楽郡東栄町の花祭情報サイトから真冬に行われる祭りで、年男が鬼の面をかぶり、笛と太鼓、そして「テーホレ、テーホレ」のかけ声に合わせ昼夜踊り続ける奇祭である。「子どもの頃に見た花祭は、今よりもっと土俗的で神秘的な雰囲気。結構、衝撃でした」
www.town.toei.aichi.jp/hana/top/top.html

- 2003年 Zainul Gallery/ダッカ・バングラデシュ
「どこか、おかしい。」佐久島弁天サロン 他島内18ヶ所/佐久島・愛知
- 2006年 「カリヤファンタジー計画」刈谷市美術館/愛知
- 2007年 「The travelling Island~YOSHIKO MATSUMOTO Gallery/アムステルダム・オランダ
- 2008年 「The travelling Island」Murata&Friends/ベルリン・ドイツ
「DOUSOJIN Tremp project」Quiosc Gallery/トレンプ・スペイン (2005)
「どこかおかしい。コドモ山の秘密」おかげさまで世界子ども美術博物館/愛知
- 2009年 「水辺のいきもの。」GALLERY APA/名古屋・愛知 (2010.2011.2012)

- 2011年 「旅する島-京都編-」GALLERY RAKU、芸術館/京都造形芸術大学/京都
「キョクノ山 蒐集記~ナギの巻~」奈良町現代美術館/岡山
「月へ行きたい。」(たくさんのふしぎ 2011年2月号) 福音館 より出版
- 2013年 「呼吸するかたち」ギャラリーなうふ現代/岐阜
「三河・三弁天」佐久島・愛知

絵画、版画、写真、彫刻など、多彩な手法で、国内外(スペイン、オランダ、ドイツなど)で多くの作品を発表。佐久島(愛知県・西尾市)でのアートワークは、2001年から現在も継続中。

面に魅せられ、高校の頃から面を制作していたという。そして、版画の課題であっても、版画にあわせて面を提出していた。「大学時代もお面を作っていました、作品として評価されるとはあまり考えていませんでした。アートの概念からは、別のものだと考えていました。でも、夏休みの課題だとか自由制作の課題の時に版画の作品と一緒に提出していくわけですね。『お前、これ版画じゃないぞ』ってなるんですけど(笑)、当時の版画の先生たちはその辺がすごく寛容で、『まあそれもよし』という感じてみてくれて、今でも感謝しています」ただし納得の行く作品は、ついぞ学生時代には作ることができなかった。「いろんな版種をやりました。必ず心掛けていたのは、これぐらいといわれたらそれよりも大きいものを作ったりとか、3版刷りはしなさいといわれたら5版刷りするとか、とにかく出された課題よりもオーバーすることを守りました。試すからには、一生懸命やらないと試すことにならないと思っていました。とにかく結果が早く欲しかったんです」焦って空回りしていたのだろう。一つに集中して取

り組むよう先生方からのアドバイスもあったのだが、聞く耳を持たず先走り続けた。結局、卒業制作も立体の作品を作った。「イメージを上手に二次元に落とし込む能力がなかったように思いますね、今思うと。気持ちばかりで……」

大学を卒業するも、作り足りない気持ちが高く、大学院が設立される前の本学に研究生として残った。当時は、景気がよくOBたちが毎月のように展覧会を開いていた。そこに出演するようになり、20代のうちは急ぎ立てられるように作品を作り続けた。しかし、満足は行かなかった。「オファーが来るとことは求められていることなので、そこできなにか結果を出したいと、認められたと。それだけだったですね。これが作りたかったんだというものには至りませんでした」

転機は、パリで訪れる。本学がシテ・デ・ザールを契約したばかりの頃、部屋に空きができ、講師として大学に勤めていた松岡氏にパリ行きのお誘いが訪れた。「ちょうど、自分の好きな形というのはなんだろうというのに、

すこし迷いはじめた時だったんですね。とにかく美術館に行きました。パリを拠点にドイツの美術館に行ったり、時間があれば展覧会を見倒しましたね。ルーブル美術館には、3ヶ月の間に述べ30日以上行ったと思います。朝から閉館まで、古代とか中世以前のエジプト、ヒッタイトとか、古い遺跡とか、とにかくスケッチしました。それが結果として大きかったですね」ルーブルで遺跡や歴史のある古いものが好きだということを再確認し、スケッチで形を体に取り入れ、そのエッセンスを自分の作品の中に注ぎ込んだ。

「自由になった感じがしましたね、帰って来てから。なんでも楽しくやって大丈夫なんだなあっていうことがパリでわかりました。美術というものの考え方が、すごく偏っていたんだと思います。ヨーロッパの美術館に展示されているものの幅の広さですね。ここからここまで美術だといわれたら、自分の思っていたのはごく小さな幅でしかありませんでした。なんだ、これも美しいものだったんだな、ということに気付かされました」作品たちが生き生きしている理由がわかった。

Information

インフォメーション

2015年度 オープンキャンパス日程



2015年

- 7月18日(土) 人間発達学部
10:00~13:30
- 7月19日(日) 美術学部・デザイン学部
10:00~16:00
- 8月22日(土) 人間発達学部
10:00~13:30
- 9月26日(土) 全学部
10:00~16:00

2016年

- 3月 5日(土) 音楽学部・人間発達学部
10:00~16:00

アート&デザインセンター 2015年度展覧会スケジュール(予定)

7/17(金)~ 7/22(水)	スペースデザインコース展(くうねるところにすむところ展)
7/17(金)~ 7/22(水)	「隣人」大学院コミュニケーションアート&デザイン演習展
7/24(金)~ 8/ 5(水)	素材展
9/18(金)~ 9/30(水)	2015年度アート&デザインセンター企画展 これまでの客員教授から見えてくる「名芸のデザイン」(仮)
10/ 2(金)~10/ 7(水)	彫刻展
10/ 9(金)~10/14(水)	洋画1コース3・4年展
10/16(金)~10/28(水)	2015年度アート&デザインセンター企画展 「佐喜真美術館のスタンス~丸木位里・俊・ケーテ・コルヴィッツを中心に」展(仮称)
10/30(金)~11/ 4(水)	アーテ!ラジオ&大学院同時代表現研究企画
11/ 6(金)~11/11(水)	遭遇するドローイング:ハノーファー&名古屋2015
11/13(金)~11/18(水)	MCDデパートメント
11/20(金)~11/25(水)	「幼稚園児たちのゲイジツ 2015」展
11/20(金)~11/25(水)	「Handospace:医療と美術」展
11/27(金)~12/ 2(水)	洋画2コース 2年生選抜展(仮称)
12/ 4(金)~12/ 9(水)	メディアデザインコース展
12/11(金)~12/16(水)	こどもの空間 絵本と椅子
12/11(金)~12/16(水)	2015年度後期留学生作品展
12/18(金)~12/23(水)	日本画3年作品展
12/18(金)~12/23(水)	洋画2人展(仮称)
12/18(金)~12/23(水)	「博物館とアートの出会い」(仮称)
1/ 8(金)~ 1/13(水)	ガラス・陶芸コース2・3年生合同展覧会(仮)
1/15(金)~ 1/20(水)	美術学部コース展
3/ 1(火)~ 3/ 6(日)	第43回名古屋芸術大学卒業制作展



※会期・内容は変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。
[入場無料]どなたでもご覧いただけます。
お問い合わせ先/ (0568) 24-0325

Open/12:15~18:00 (最終日は17:00まで)
日曜・祝祭日原則休館

2015年度 音楽学部演奏会スケジュール(予定)

7月
コンチェルトの夕べ
日時/2015年7月16日(木)18:30開演予定
会場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料(全自由席)

8月
ピアノサマーコンサート
日時/2015年8月8日(土)13:30開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料(全自由席)

NUA Strings 第8回定期演奏会
日時/2015年8月30日(日)15:00開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料(全自由席)

9月
ウインドオーケストラ 第34回定期演奏会
日時/2015年9月21日(月・祝)13:30開演予定
会場/愛知県芸術劇場コンサートホール
入場料/無料(全自由席)

10月
研究生特別演奏会
日時/2015年10月8日(木)18:00開演予定
会場/電気文化会館 ザ・コンサートホール
入場料/無料(全自由席)

オーケストラ 第33回定期演奏会
日時/2015年10月31日(土)13:30開演予定
会場/愛知県芸術劇場コンサートホール
入場料/無料(全自由席)

11月
室内楽の夕べ(仮)
日時/2015年11月12日(木)開演時間未定
会場/電気文化会館 ザ・コンサートホール

入場料/無料(全自由席)
音楽学部 第38回定期演奏会
日時/2015年11月19日(木)18:00開演予定
会場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料(全自由席)

12月
第18回 電子オルガンコース定期演奏会「Earth Echo」
日時/2015年12月10日(木)18:30開演予定
会場/熱田文化小劇場
入場料/無料(全自由席)

室内楽の夕べ
日時/2015年12月中旬 18:00開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料(全自由席)

2月
第14回 歌曲の夕べ
日時/2016年2月4日(木)18:30開演予定
会場/熱田文化小劇場
入場料/無料(全自由席)

2015年度 研究生修了演奏会
日時/2016年2月9日(火)18:00開演予定
会場/電気文化会館 ザ・コンサートホール
入場料/無料(全自由席)

大学院音楽研究科特別演奏会
日時/2016年2月12日(金)17:45開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料(全自由席)

第20回 春のコンサート ピアノのしらべ
日時/2016年2月19日(金)17:30開演予定
会場/熱田文化小劇場

入場料/無料(全自由席)
アンサンブル・フィラルモニク・ア・ヴァン 第17回定期演奏会
日時/2016年2月20日(土)14:00開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料(全自由席)

カレドスコープ2016
日時/2016年2月21日(日)16:00開演予定
会場/名古屋芸術大学音楽学部2号館
大アンサンブル室
入場料/無料(全自由席)

オペラ公演「あまじやくとらうりこひめ」[子供と魔法]
日時/2016年2月26日(金)18:30開演予定
会場/西文化小劇場
入場料/未定

オペラ公演「あまじやくとらうりこひめ」[子供と魔法]
日時/2016年2月27日(土)14:00開演予定
会場/西文化小劇場
入場料/未定

3月
第18回 大学院音楽研究科修了演奏会
日時/2016年3月3日(木)18:00開演予定
会場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料(全自由席)

ミュージカル公演
日時/2016年3月4日(金)18:00開演予定
会場/アートピアホール
入場料/無料(全自由席)

第43回卒業演奏会
日時/2016年3月10日(木)17:00開演予定
会場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料(全自由席)

※予定につき変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。
お問合せ先/名古屋芸術大学音楽学部演奏課(0568)24-5141
※オペラ公演については(株)クレアーレ
Tel. 0568-26-3355に
お問い合わせください。

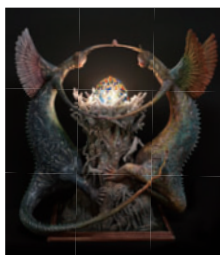
チケット取り扱い場所

- 名古屋芸術大学音楽学部演奏課
Tel. 0568-24-5141
- 名古屋音楽学校
Tel. 052-973-3456
- 愛知芸術文化センターB2Fプレイガイド
Tel. 052-972-0430
- ヤマミュージック東海名古屋支店
プレイガイド
Tel. 052-201-5152
- カワイ名古屋
Tel. 052-962-3939
- ※オペラ公演については(株)クレアーレ
Tel. 0568-26-3355に
お問い合わせください。

表紙の写真

「embrace」
石粉粘土 水彩
美術学部アートクリエイターコース卒業生
植田 明志さん

絵本の一場面を見るような、物語を感じさせる作品。どこまでも精密に作り込まれたディテールと作品が持つ躍動感。見る者を捉えて放さない。機会があれば、ぜひ実物をご覧いただきたい。「ラシック・クリエーターズフェスタ」「ワンダーフェスティバル」等に出品。精力的に活動中。



「名古屋芸大
グループ通信」
ウェブサイト



発行: 名古屋芸術大学
企画・編集: 全学広報誌編集委員会
デザイン・協力: くまな工房一社
印刷: 株式会社クックス
発行日: 2015年7月15日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市西之庄吉井281番地
電話 0568-24-0359
FAX 0568-24-0369
E-mail: grouptu-shin@nua.ac.jp



大学基準協会の認定評価を再取得しました

本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再度取得しました。認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移動や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。